

## 紹介

● Ulrich Wilcken : Alexander der Grosse.

稀代の英雄アレクサンドロスの絶世の鴻業によつて、従來西亜と東歐との間の一帯帯水を距て、而も文化的には截然と區別さるべき形態に於て相對立して居た東方文化と希臘文化とが、互に相接し相融合し統一的形態を形成し發展すべき潮流の上に置かれた。かくて生成發展せしもの所謂ヘレニズム文化である。彼の後繼者ディアドコイ統治下の各地方の文化は勿論、紀元前三世紀の初頭ヘレニズム的商業諸國へ進出せんとする意圖を具體化するものと觀られる銀貨 *denar* の鑄造に於てローマ文化のヘレニズム化を表明せし頃より、一般に希臘文化の模倣を以てその文化運動の基調とする共和末期迄のローマ文化も、ヘレニズム文化を基調としてそのエザプト的或はローマ的發現として初めて正しき理解に到達することが出来る。而してその基調となるヘレニズムの把握はそれを創造せるアレクサンドロスの事業の歴史的認識を俟つて初めて可能である。

*Pseudo-Kallisthenes* のアレクサンドロス物語以來、古代・中世を通じて、物語の霞の彼方に隠されて居た彼の眞の相貌を學的歴史の光の此方に迄導き出したのは *T. G. Droysen* ; *Geschichte Alexanders des Grossen* (初版は一八三三年に出て、一九

二五年第七版を出版す)の功績である。が爾來百年間のアレクサンドロス研究を以てしても尙解決せられざる幾多の問題を残して居るのである。蓋し *Kallisthenes*, *Ooniskritos*, *Nearchos*, *Klitarchos*, *Aristobulos*, *Ptolemaios* 等彼と同時代又はその直後の人々の作品がローマ帝政時代の文學史上所謂 *Klassizismus* の波に洗ひ流され、アレクサンドロス研究の根本史料となるべき

それ等の作品は、少くとも三百年以上の時の経過のうちに數多の小主觀の混入・介在が行はれた上に出来上つた *Diodoros*, *Florus Pompeius* (彼の書も現在では後の *Justinus* の書を通じてのみ窺はれるに過ぎぬ) *Curtius Rufus*, *Plutarchos*, *Arrianus* 等の著述に於てのみ殘され、加之、此れ等後世の歴史的著作に

あらはれて居る歴史事實も各著作家間に一致せざる點少しとしない。加ふるそれ等の書によつて知られるアレクサンドロスの個性そのもの、超人間的性格は容易に之を把握し得られないものを含む。此れ等諸事情によつてアレクサンドロスの全體的把握は極めて困難なものである。今本書を通讀するに著者は前記後期古代著作家の作品並に近代史家の諸研究を彼此參照して可及的に事實の精密にして正鵠なる姿を求め、それを多くは毀譽貶褒を結果する古代作家の倫理的史觀より離れて、近代的世界史觀の上に觀照してその世界史的意義を闡明ならしめて居る。勿論本書の本文は三百三頁にして著書の手指して居る——アレクサンドロスの世界帝國出現の前提となる前四世紀の希臘の政治的、經濟的、思想的情勢、マケドニアの政治的統

一、軍備の改善、希臘文化輸入によるマケドニヤ文化の向上を計りし父王ピユリッポスの事業(第一章、第二章)、アレクサンドロスの生立ちより、彼が父王の後を継ぎ小亞・シリア・エジプト・ペルシヤ・更に遠く印度のパンジヤア地方迄大遠征せし跡を辿り、その間に發展せしアレクサンドロスの、政治上、經濟上、宗教上の地位(第四章―第九章)、彼のティアドコイの諸政策に觀取されるアレクサンドロス精神、ローマの發展に伴ふそのヘレニズム化、更にガンダラ美術又は所謂 Alexanderoman 等によつて彼の世界史上の生命の描寫(第十章)——等の敘述の爲には此の紙数は決して多しとしない。従つて著者の本書に於ける主要目的がアレクサンドロスの遠征に伴ふ彼の東方に於ける地位の二重的性格——コロント同盟に對してはその *Keim* であると共に、アシア諸民族に對しては絶對的君主である——を明にすると共に彼の理想の展開を跡づけんとするにありしことを一應度外視して本書を見るならば、全體としてはその論述の疎密相混淆せるを覺えるのである。殊に彼の理想發展の考究に重大なる關係を有つ *topoi* の取扱に於て、それが著者の本書の主要目的とするものに深き輪關ある問題だけに、精密なる史料批判の上に一般にアレクサンドロスの *topoi* を虚傳なりとす *W. W. Tarn* (Alexander's *topoi* and the World-Kingdom, in Journal of Hellenic Studies, XII, 1921) の説の駁論としては、著者の「アレクサンドロスの世界支配の理想把束よりして」そのあり得べきことなりとの主張は薄弱である。

先ずかく主張する先にターンの史料批判の誤謬を指摘しておくべきではなかつたか。かくの如く時にそのまゝでは俄に首肯し得ざる所あるも、大體に於て、第四章より第九章に至る迄はアレクサンドロスの東方に於ける支配者としての地位及その政策のもつ根本思想の研究の指針たるべく、第一章―第三章迄はヘレニズム前期としてマケドニヤ、ギリシヤの文化諸事象の研究に、第十章は、特にティアドコイ、及び共和末期三世紀間のローマに於ける文化發展考究に對する觀點を教授するものと言ひ得る。

本書に於ける著者の筆致は、彼の Griechische Ostrika, 又は Grundzüge und Geschichte der Papyrkunde に於けるそれのむしろ無味乾燥的なるに比して、極めて *lebenschafflich* である。このことは取扱ひし問題そのものの性質によることと考へられるのであるが、本書はその爲に讀者をして一種の讀み物的作品に對するかの如き感を抱かしめるものがある。勿論このことは本書に見られる卓越せる著者の世界史的理解を徹ふものでなく、却て吾々はこれあるによつて本書により世界史上重要にして而も困難なるアレクサンドロスの理解を、生き／＼とした彼の姿を現前しつゝ、受けとることが出来るのである。終りに本書が昨年 (F. C. Richards) によつて英譯されたことを附言して擧筆する。(菊版大、本文三百一頁、Leipzig, 1931) (井上)